

多読学習の試み —授業運営と環境整備—

Essai de lecture "extensive" - la mise en pratique et l'aménagement de l'environnement -

HIRAMATSU Naoko KUNIEDA Takahiro KOISHI Atsuko
平松 尚子・國枝 孝弘・古石 篤子

Université Keio SFC

hr@sfc.keio.ac.jp, kunieda@sfc.keio.ac.jp, akak@sfc.keio.ac.jp

Cet article a pour but de présenter un essai de cours de lecture "extensive" (extensive reading) de la section de français de l'Université Keio SFC. Le projet conserve la ligne précédente de la version anglaise de "Interactive Reading Community" et sa méthode se distingue des formes traditionnelles utilisées en cours de littérature ou de lecture. Plusieurs procédés de mise en pratique (l'achat de livres et les critères de sélection, la construction de BBS sur le web, l'introduction du système "Reading marathon", etc.) nous ont amenés à remettre en question certains éléments constitutifs de l'apprentissage : l'étudiant-lecteur, le professeur, ainsi que la classe en tant que communauté d'apprentissage.

0. はじめに

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)フランス語セクションでは、2005年秋学期より多読の授業を実践している。多読という学習方法は英語教育の分野ではすでにさまざまな試みがあるが、我々の試みは水野邦太郎氏のInteractive Reading Community (IRC)¹の理念と方法を踏襲し、そのフランス語版としてスタートした。本稿では、学習デザインの観点から、既存の読解力養成法との相違点を明らかにし、多読学習の目的を確認したのち、2005年秋学期から2006年秋学期までの3学期間にわたる多読授業プログラムの実践報告を行う。また、これまでの成果を「学生」「教師」「教室」という3つの観点から振り返ることによって、自律的な読み手への成長、教師の役割の転換、教室という場の持つ新しい可能性について考えてみたい。

1. 多読学習の目的・意義・問題点

外国語リーディング教育で用いられている多読(extensive reading)とは、学習者が自分の言語習熟度や興味にあった本を自由に選択し、自分のペースで読みすすめていく学習方法である。学習者は、従来のリーディング教育で求められていたような語句や文法といった言語形式の理解にとらわれすぎることなく、意味内容に対して意識を向け、本から本へとかなりの速さで読みすすめていくので、結果的に多くの本を読めるというメリットがある。

一般的な多読学習の目的は、1. 学習言語に触れる量を増やす、2. 本の選び方を

学ぶ、3. 良い読書習慣を培う、という3点に集約できる。学習言語でたくさん読むという学習方法なので、結果的に学習言語に触れる量が増える。また、学習者自身が自分の学習言語レベルや興味にあった本を教材として選択し読書を進めていくことから、学習者は適書・良書の選択眼を養うことになる。また、好きな本を自分のペースで読みすすめていくので、学習者が自分の読みの理解度を自分で確認し、自身の読解活動や読解過程をモニターすることになり、結果的に、より理想的な読書習慣が培われるというわけである。

さて、ここで多読と既存の読解力養成法との相違点をみておきたい。既存の読解力養成法のわかりやすい例として、文法訳読法や、テキストから必要な情報だけを抜き出してくるような「読む」学習を取り上げた。

表1 既存の読解力養成法との相違点

	文法訳読法や講読	Compréhension écrite	多読
学習目的	内容の正確な理解	内容の大まかな理解	内容の大まかな理解
学習活動	語句や文法の説明	内容の理解を意識して読む	内容の理解を意識して どんどん読みすすめる
学習者の意識	語句や文法	要点や概要	要点や概要
読む速度	遅い	速い	学習者が各自のペース で読みすすめる
読書量	少ない	?	(学習者によるが) 多い
教材	教師が指定	教師が指定	学習者が自由に選択

灰色で示された3項目が多読学習の特徴だと言えるが、いずれも多読が学習者主体の学習法であることを表している。学習者は自分の読みたい本を自由に選択し、自分のペースで無理なく読書を進めることができるので、読書意欲を継続しやすいという動機づけの観点からみたメリットがある。さらに、読書を続けるうちに読書のスピードがアップし、より多くの本が読めるようになるという好循環が認められる。しかしこのような多読学習において、考慮しなくてはならないのが教室という「場」であり、その場における学習者の活動である。一般的な多読教育では、授業時間が純粹に読書の時間として用いられたり、そうでない場合には速読などの読解技術の解説のために使われることが多い。そのような場合、「授業に学習者が集まる意義が失われがちであること、また自分の読解に対して他人の意見を知る機会がないため、読解を深めるということができない」(川村 2004) という問題が生じる。つまり、学習者が集まる教室という学び合いの場が十全に生かせないということである。

この問題点を解決しているのが、多読教育プログラムのひとつである **Interactive Reading Community (IRC)** (<http://irc.crew.sfc.keio.ac.jp/irc/>) である。IRC の特徴は、学習者同士のコミュニケーションを重視していることである。読書は各学習者によって教室外で行われ、授業では、読了した本の紹介とその本についての学習者同士の議論が行われる。読書という本来個人的な活動を出発点として、学習者同士の意見交換というコミュニケーションを導入することによって、他の学習者の価値観に触れつつ自身の読解をより深めることを目的としている。また、読了した本の書評は、

教室での発表に先立ってインターネット上に公開することになっているが、教室でのリアクションを超えて、他のクラスや他大学の学習者たちとインターネットを介してコメントのやりとりを行うことが可能である。つまり学習者は、時空間を越えた他学習者とのコミュニケーションを通じて自身の読解を深めていくことになるが、こうした「協調学習」を支援することによって、「自律的な読み手を育てる」ことを目的としているのが IRC であり、SFC フランス語セクションの多読教育プログラムも IRC の理念と方法を踏襲している。したがって、上でみた一般的な多読学習の目的に、「学びの共同体を形成することにより、自律学習を促進し、自律的な読み手を育てる」という新しい一項目が加わることになる。

2. 実践報告

大学での初習言語である「フランス語」での IRC は、メディアセンターの協力のもと、2005 年春に 500 冊以上の図書がそろった。またフランス語セクションにも 50 冊あまりの図書を用意して、実践の体制が整った。

2-1 2005 年度秋学期(パイロット版)

SFC フランス語セクションにおける多読プログラムは、2005 年秋学期をパイロット版として國枝孝弘が担当した。授業設定レベルはフランス語学習暦 1 年半以上に設定され、履修者 8 名でスタートした。授業開始に先立って、協調学習を支援する新たな教育ツールとしての BBS システムを構築し、運用に向けて準備が整えられた。具体的な授業のすすめ方は以下のとおりである。

- 1) (原則として) 2 週間に 1 冊本を読む。
- 2) 授業前日の夜までに感想レポートを指定の WEB にアップする
- 3) 感想レポートは 400 字~800 字。またそれ以外にキーとなる一文 (あるいは複数) を抜粋した上で、訳文をつける。
- 4) 授業ではその感想レポートに基づいて日本語でプレゼンテーションをする (約 5 分間)。
- 5) その後プレゼンテーションの内容に基づき、5 分間の質疑応答。基本はフランス語で行う。

履修者の何人かは最初わりと簡単な作品を選ぶ傾向があったが、それではプレゼンテーションで他の学生の興味をひきつけられないということに気づき、次第に、内容のともなった作品を選ぶようになった。Folio Junior が多いが、友人関係や環境問題、そして戦争などをテーマとした作品が読まれた。また上記の IRC にはないフランス語での質疑応答を入れたのは、やはりフランス語の授業でフランス語を使わないということにためらいがあったからである。

2-2 2006 年度春学期

2006 年度春学期はパイロット版を受けた本格的なスタートとなり、当学期以降は平松尚子が担当している。授業設定レベルは前学期と同様で、履修者は 7 名であった。履修者全員が好成績を残したパイロット版の授業のすすめ方を踏襲し、BBS システムを継続して運用したが、新たにリーディング・マラソン²方式を導入して、読書量をよりわかりやすく視覚化し、ゲーム感覚で読書量を伸ばしてもらえるようにした。また、初回授業時に、既習分析・読書習慣分析・ニーズ分析に合わせたアンケートを実施して、必要があれば各学習者に効果的なアドバイスができるよう努

めた。しかし、この学期は脱落者（途中で授業に来なくなった学生）が多く、総括すると失敗と言わざるを得ない。具体的には、履修者7名のうち、1冊目を読み終えられず脱落した学生が1名、2冊目以降で脱落した学生が3名、最終的にマラソンにゴール（仮の目標ではあったが130km以上走破）したのは7名中2名という結果であった。この結果は次学期に向けて、1. 学習者が自分の言語習熟度に合わせた本（特に1, 2冊目）を選ぶ際の教師の適切なアドバイス、2. 読書を習慣化するための支援、3. 適書・良書選択のアドバイスが必要であるという課題を残した。つまり、読書の主体は学習者ではあるのだが、一連の活動において、教師による教育的介入が不可欠ということである。

2-3 2006年度秋学期

授業設定レベルは前2学期と同様で、履修者は聴講生1名を含め7名であった。当学期は、前学期までで効果的であると思われた方法はすべて継続し、前学期の結果から明らかになった課題を効果的に実施することが求められた。特に、学習者が1冊目の本を選ぶとき、学習者は自分の興味や知的レベルに合わせた本を手に取りやすいが、それは必ずしも自分の学習言語レベルに見合ったものでないことがある。このような場合に、少なくとも最初の2, 3冊目までは、より適切な言語レベルの本の選択へと学習者を導く必要がある。また、適書・良書選択のアドバイスについては、学習者は古典的名作よりも、フランスで今どんな本が読まれているか知りたい！という傾向が顕著に見られ、メディアセンター在架の書籍だけでなく、現在のベストセラーや文学賞受賞作などを「*Livre de la semaine*」のコーナーで教師が授業中に紹介した。こうした試みの結果、当学期は1名を除き聴講生を含む6名がリーディング・マラソンにゴールし、学生・教師ともに満足できる結果となった。

3. これまでの成果

3学期にわたる試みから得たこれまでの成果を、「学生」「教師」「教室」という3つの観点から振り返りたい。まず学生は、多読学習を通じて自分の興味と学習言語レベルに応じた良書＝適書の選び方を学び、さらに恒常的な読書の習慣を身につけることができたようである。これは、生涯を通じて自律した読者を育てるという多読教育の大きな目的である。次に、多読学習において、教師はその役割を大きく転換させることになる。教師がもはや一方的に知識を伝達する存在でないことはすでに明らかだが、多読の授業では、アクティビティを導く"animateur"でもない。教師は、学習者の進むべき道（本の選択と恒常的な読書）を示し、学習活動を支援する良きナビゲーターであることが求められる。そして、教室という場に作られる「学びの共同体」の意義。学力が同等のクラス(*classe homogène*)を対象にしてきた従来の講読のような授業とは異なり、多読では言語習熟度の異なるクラス(*classe hétérogène*)を対象にした授業運営が可能である。これには学習者の言語レベルが異なる場合と、学習者のタイプ（質）が異なる場合がある。多読授業における学習者の言語レベルの違いは、教室における学習者同士のコミュニケーションを通じて、次のような変化として表れた。

- ・魅力的で人の心を捉える本の紹介をするために、内容のある本、自分自身が感動する良書を選ぶようになる。

- ・初級者は、上級者の紹介する本のレベルの高さに刺激を受ける。

・学習レベルを問わず、「あの人はこんな本を読んでいる」という他学習者の選書眼からの刺激や学びがある。

また多読は、学習者のタイプ（質）が異なるクラスを対象にした授業運営が可能であるが、これは、他学部のクラスや他大学、他学習機関との交流が可能だということで、多読の授業で現在運用しているBBSシステム³はそういった交流を十分に支援するものである。



4. おわりに

SFC フランス語セクションが行っている多読学習の試みについて報告してきたが、最後に、フランス語多読学習ネットワークへの参加を呼びかけて本稿の終わりとしたい。すでに述べたように、SFC の多読教育は「自律的な読み手を育てる」ための「学びの共同体」の形成を目指して BBS システムが用意されているが、このシステムは学部や大学を超えて運用可能であり、またそのような拡がりを目指して構築されている。授業内外でフランス語多読学習を実践されている、あるいはされようとしている方で、フランス語多読学習ネットワークを通じて SFC の学生と交流しようと思われる方がいれば、ぜひ担当の平松(hr@sfc.keio.ac.jp)まで御連絡いただきたい。

参考文献

- 川村昌弘、『学習者同士のコミュニケーションを重視した多読教育を支援する Web アプリケーションの開発』, 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士論文, 2004.
- 川村昌弘, 水野邦太郎, 「学習者同士のコミュニケーションを通じた多読を支援する Web アプリケーションの開発」, 教育システム情報学会第 5 回研究会, 2005.
- 水野邦太郎, 「『出会い』と『対話』のある多読の授業」, 『英語教育』, 2003.
- 村野井仁, 「第二言語習得研究からみた多読指導」, 『英語教育』, 2004 年 2 月号.

¹ Interactive Reading Community については 1. で詳述。
² IRC の方式を参考にしたもので、400 語を 1km に換算する。
³ <http://french.sfc.keio.ac.jp/tadoku/> 2007 年度春学期から運用しているシステムで、パスワードを設定しているため外部からの閲覧は不可となっている。